

## 「筑駒図書館」の変遷2012－2014

－高度情報化推進事業の一環として－

筑波大学附属駒場中・高等学校 図書館司書

加藤 志保・岩崎 春子

国語科（司書教諭）

澤田 英輔



# 「筑駒図書館」の変遷2012－2014

－高度情報化推進事業の一環として－

筑波大学附属駒場中・高等学校 図書館司書

加藤 志保・岩崎 春子

国語科（司書教諭）

澤田 英輔

## 要約

本稿は高度情報化推進事業の一環として、2012年度から学校司書と司書教諭が協力し取り組んだ、本校図書館改革の報告である。学校図書館は生涯学習者としての将来にわたる図書館利用の入口である。そこで生徒・教職員にとって利用し易い図書館となることを第一に、そのために本校の校風を反映した「筑駒らしい図書館づくり」を実現することをコンセプトに掲げた。本校の特色や環境を最大限に生かして、「蔵書」「環境」「利活用」の三点を軸にリニューアルを進めた。筑駒らしさをどのように「蔵書」や「環境」に落とし込み、「利活用」に反映させてきたのか。それらの効果はどう現れてきているのか。今後の課題を含めて、この3年間の変遷を報告する。

キーワード：学校図書館、司書教諭、学校司書、図書館デザイン

## 1 はじめに

本は孤独を支え、本は知を届ける。本の並ぶ図書館の中で、心を落ち着け、継承されてきた知識や知恵にふれ、自らの疑問や課題の解決の糸口を探し、あらたな世界に扉を開く。それを大きな意味で「生涯学習」と呼ぶ。人は生きる限り学び続けていく生き物であり、生き続けている限り学びの場を必要とする。ひとりひとりの「生涯学習」を支えるために、図書館は存在する。

「ゆりかごから墓場まで図書館はあなたのとりにある」。そのメッセージを伝えるために図書館員はいる。学校図書館の図書館員は、生徒たちに図書館の味わい方を伝え、学校を卒業したあとも、大学では大学図書館を、社会に出たら公立図書館などを気軽に利用できるおとなになってもらいたいという願いを抱いて仕事をしている。

私たち司書は、筑駒の図書館が、筑駒生たちの図書館への親しみを持つきっかけとなることを願い、筑駒教職員たちの学びを支える場となることを願い、この3年間「筑駒図書館」の改革に力を注いできた。

私たちが着任当初、心がけたのは、「筑駒らしさ」が表れた図書館にすることだった。筑駒らしさとは何か。ひとりひとりが自立し、各々に教えるスタイル、学ぶスタイルを持ち、それらが尊重され互いに学び合うことで、教養が育まれるというものである。

教員たちのユニークな授業が持つ図書館へのニーズは画一的ではない。授業の準備、授業の実施、授業成果の発表の場等々、その個々別々のありかたに応じたニーズに幅広く応えるべく、書架を整理し、ブックトラックを用意し、企画展示を展開し、図書館の空間を作ってきた。

生徒たちの図書館利用は、本の利用と、場の利用の2点だ。読みたい本が手に入る図書館となるために、購入のリクエスト、取り寄せのリクエストにこたえ、潜在的な「読みたい」を引き出す機会を設けてきた。配架においても書架整理を行い、わかりやすく見やすい図書サインの表示を行った。図書館が快適な場となるよう、自習したい生徒と寛ぎたい生徒の空間を分け、カラフルな色合いをところどころに持ち込み、あたたかみと動きがある展示などで図書館の空間をデザインしてきた。

その結果、人と情報が行き交う場としての図書館空間が確立してきている。教員と生徒、教員同士、学年を超えた生徒同士、学校内の課外の活動も含めた学校の動きなどが混在し、おのずとあちらからこちら、こちらからあちらへ情報が手渡される場となっている。教員が薦める本がメッセージを伴って並び、生徒へ他の教員へ、その本の価値、魅力を伝える。過去の生徒の報告書、研究の成果が現在の生徒の目に届く。ごく一部の生徒の活動、教員主催の対外的な学校活動も、他の情報と等しく校内に伝わる。本を求めてやってきた中学生は、高校生の自習する姿を日々目にする。本を借りにくる教職員の姿が、生徒たちに、卒業後の長い人生の未来の姿として差し出される。

この3年間で私たちがたどり着いた「筑駒図書館」はそのような場だ。「教養の筑駒」の筑駒らしい図書館の一步を踏み出せただろうか。

まだまだ道半ばではあるが、今後も自由な意思と独自のスタイルを表現できる図書館を目指したい。筑駒の構成員だれもがフラリと立ち寄ることができ、自らの関心、好奇心、知への欲求を発揮できる図書館を目指したい。人と情報が風通しよく動き、刺激や発見を得る空間となることを目指したい。そして、願わくは生徒たちにとって、何十年と経ても図書館という場を慕わしく思う、筑駒図書館でのひとときがその原風景のひとつとなることを。

## 2 図書館空間のデザイン

「筑駒らしい図書館づくり」をコンセプトに掲げたとき、どのように図書館という空間をデザインしていくかが私たち司書の第一の課題となる。「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」学校目標の達成に寄与するために、デザインの要素として「蔵書」「環境」「利活用」の三つを軸に、図書館づくりを展開した。その実践を次に紹介する。

図書館をデザインするにあたって、筑波大学の情報学群知識情報・図書館学類で学校図書館を専門としている平久江祐司教授に高大連携の実践を兼ねてサポートしていただいた。2012年5月25日に実際に本校図書館を見ていただき、その上で、定期的に館内の様子や利用のされ方の変化等を報告し、館内のゾーニングや運営に関してアドバイスを受けたものを反映させながら空間のリニューアルに取り組んだ。

### 2.1 蔵書の構築、蔵書のひろがり

図書館を構成する最大の要素は、言うまでもなく本＝「蔵書」だ。「筑駒らしい蔵書」を構築するために、生徒や教職員の本へのニーズを、選書の機会に組み込む取り組みをはじめた。

#### 2.1.1 リクエストによる選書

着任当初、書架を眺めながら、分類や並びが整えられていない、表示が少ない、古い本に新しい本が埋められている。それらが要因で本が利用者に呼びかけてこない印象を受けた。そこで生徒、教職員の求める本が「まずはある」ことが大事と考え、欲しい本をたずねるためにリクエストボックスを置いた。翌日にはすぐにリクエストカードが入り、利用のニーズが目の前にあることがわかった。リクエストに応え入荷するまでの間、一枚一枚のリクエストカードへメッセージを書き込み、回答を貼り出していった。

リクエストカードは匿名化し、メッセージを返して貼りだすものはすべて氏名を隠し、生徒から希望を発信しやすくなるよう配慮した。購入された本については新着コーナーへ並べた。



リクエストボードをたびたび覗きに来てはリクエストへのフィードバックを確かめる生徒の姿を見かけることが増えると同時に、生徒が直接カウンターに来て「〇〇〇〇が欲しい」と司書に話しかけたり、新聞広告の切り抜きに「これを入れてください」と書いてリクエストボックスに入れたりすることもあり、希望を伝える方法はどのような形も歓迎した。

メッセージの「発注しました」を読んで、まだですか、まだ届きませんか、届きましたか、と日参する生徒もいる。また、自分がすでに読み終えた本からリストアップして図書館の蔵書に加えて欲しい、他の生徒、後輩にも読んでもらいたいと伝える生徒も現れ始めた。

教員のリクエストも、教科推薦図書購入とは別に、時期や手段を限定せずに受け付けることにした。「こ

れはいい本でした」「これは生徒に紹介したい本です」「これを使いたいので入れてもらえませんか」等々、口頭だったり、リストを作成したり、書評の切り抜きを持って申し出るケースが年間を通じてある。教科推薦図書は年に一度となるが、そのタイミングではリスト化にいたらない場合も多い。授業計画を練りながら、授業に関して読みたい本、読ませたい本が生じてくる場合もあるだろう。複数のリクエスト方法、リクエスト機会を用意することによって、教員にもより高い自由度を保証したいと考えている。

手探りではじめたリクエストカードは一年目に112件、二年目には131件と定着し、三年目には、直接司書を見つけてあれを入れて欲しい、と口頭で伝える場面が増えている。リクエストという方法が生徒や教員と司書とのコミュニケーションのきっかけ作りの役割を果たしているといえよう。

### 2.1.2 雑誌・新聞

資料のひとつに雑誌がある。雑誌は当初図書館外のコモンスペースに配架され、館内で目にするのがなかった。そこで新刊は図書スペースの雑誌架に、バックナンバーはコモンスペースに配架することとした。年刊購読の雑誌の種類をおよそ倍に増やし、分野も広げて購読することとした。

図書スペースに新刊雑誌を置き数を増やす試みに先立ち、雑誌の存在を広く知らせる機会にすべく購読したい雑誌を投票で選出する方法をとった。11月から12月にかけて「雑誌投票」と銘打ち、図書スペース内に図書メディア委員が絞り込んだ候補のサンプル誌を取り揃え、シールにて投票してもらった。



コーナーを設けることで、図書館が雑誌も扱うことを伝え、定期購読する雑誌の種類を知りタイトルを選ぶことで関心を寄せてもらう機会を作り出した。

投票の結果、購読することになった雑誌類について、発刊日の直後には「届きましたか」「まだですか」と

雑誌架に新刊雑誌が並ぶことを待つ生徒があらわれたり、これまでコモンスペースに足を運ばない生徒たちが雑誌を手にとるようになった。本の利用とは異なる図書館ユーザーの掘り起こしにつながった。教員からもこの雑誌を入れて欲しいというリクエストがあり、年度途中で追加した雑誌もある。

新聞についても、特に本校の特色である地域研究の「東京地域研究」に照らして東京新聞の購読を開始した。「東北地域研究」では、取り組む学年が地方紙購読を決めた際には図書館に設置し、当該学年だけではなく、他学年の生徒も読むことができるようになっている。

### 2.1.3 投票による選書

雑誌で用いた投票スタイルは、一般の書籍選びにも取り入れている。シリーズのものでは、出版目録から欲しい本を探し、それに投票する形をとっている。既存の蔵書の有無を確認をしたあと、教員の選出、生徒の選出を加え、希望書リストを整える。この方法は「自らが選ぶ機会を持つこと」「選んだ本を楽しみに待つ時間」や「あらたな種類の本を知る」などの機会を作ることができる。

2012年12月にSSH指定校に対し講談社よりブルーバックスが100冊贈呈されることとなった。教員が選書することはもちろん、生徒にもこの機会に「ブルーバックス」を知ってもらい、自ら図書館に置きたいタイトルを選べるよう、「ブルーバックス投票コーナー」を設けた。



納入までの間、投票を行った生徒たちから「いつ入りますか」「もう入りましたか」などの声がかかった。生徒同士で、「ブルーバックスって何？」という質問に「あそこにあるあれだよ」といった会話を耳にすることもあり、生徒に周知された様子がうかがえた。周知から利用に至った様子は表1の貸出冊数の変化からも見て取ることができる。

表 1. ブルーボックス貸出冊数推移

| 年度      | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 |
|---------|------|------|------|------|
| ブルーボックス | 2冊   | 25冊  | 26冊  | 116冊 |

2013年度に図書メディア委員のもとで文春文庫50冊贈呈に応募し当選した際も文春文庫コーナーを設置し、文春文庫のカタログを取り寄せ、投票選書を行った。委員の呼びかけに応じて集まった生徒たちで50冊の希望リストを作成した。

これら寄贈図書を獲得する作業は、蔵書を増やす数の上の効用はもちろん、生徒・教職員に対して蔵書の現状を紹介する機会になった。同時に、司書が本校図書館の既存の蔵書を把握し、利用傾向や、潜在的ニーズや興味関心をとらえる機会にもなっている。

文春文庫は、2008年度から2011年度まで一度も借りられることがなく、2012年度にのべ34冊だった貸出が、2013年度にはのべ138冊へと拡大した。雑誌や、ブルーボックス、文春文庫等の貸出数の推移と照らし合わせると、まとまった展示と投票の機会を設けることは、生徒の関心をとらえ投票行動を促し、図書館利用につながることを実感できる結果となっている。

#### 2.1.4 選書ツアー、ブックキャラバン

選書の機会として図書メディア委員会で店頭選書を行うツアーを実施している。紀伊国屋書店新宿南店にて一人一台端末を借り、本のバーコードを読み込みながら店内で自由に選書を行う。後日書店より送られた選書リストをもとに、蔵書の有無を確認し、図書メディア委員が購入を再検討し、館内の蔵書構成等に配慮しながらリストの絞り込みを行うプロセスを経て発注している。委員生徒に蔵書の現状に理解を促すとともに、自校の図書館に何が必要かを考える機会ともなっている。



また店頭まで足を運ぶことなく校内で実物をみながら選書できる機会として、図書館流通センター (TRC) の協力を得て図書館内にてブックキャラバン

を実施した。ブックキャラバンは月曜の12時～16時と、昼休みと放課後を含んだ時間に設定し、生徒・教職員が自由に立ち寄れるよう配慮した。



TRCの持ち込んだ本から選ぶということでは限られた中での選書となるが、校内に居て短時間でも実物の資料に触れて読みたいもの、置きたいものを選ぶことができる利点はある。

これらの作業には、生徒・教職員たちがどのような本に関心があるか、どのような本が本校図書館に必要と考えているかが現れる。これらで得た選書リストは別の図書購入の機会にも参考資料として大きな力を発揮している。

#### 2.1.5 寄贈本の活用

学校には毎年度末に退職あるいは他校へ異動する教員がいる。こうした教員が、準備室を片付ける際に廃棄するのは惜しいものの、持って行くことも難しい図書を寄贈するケースがある。そうした図書の多くは、これまでその教員が授業でテーマとして扱ってきた内容に関するものであり、図書館の蔵書とすることで本校における学習課題の傾向を継承する資料となる。

現役の教員からも過去の授業で取り扱ってきた図書の提供があり、それらは上記と同じ理由で、蔵書構成を豊かにし伝統や歴史を伝えながら蔵書の厚みを増すことが期待できる。本校の伝統的な学習のスタイルは、大きな課題に対し、自らテーマを定めて掘り下げる形でレポートを書くものである。これまで学んできた内容に関する資料が豊富であればあるほど、生徒たちが自らのテーマを定める際にも、助けとなるだろう。

限られた予算の中では、新規に購入できる図書の数の限界や、各教科とのバランスなども考慮する必要がある。寄贈される図書にはそこを補強する力がある。新学期には、それら寄贈書による新着図書を寄贈マーク入りで目立つ場所に置いた。本校の教員集団がこの

ような寄贈を行っていることを見える形で生徒にも教員にも示し、良質の寄贈図書が集まる工夫をしている。

## 2.1.6 大学図書館、公共図書館からの取り寄せ

2.1.1 のリクエストの中には、古すぎて購入の難しい本、高価な専門書で他の場面で利用される可能性が低く購入を迷う本が混じることがある。本校の生徒が中高生のうちから専門性の高い学習へと移行している様子をあらわしている。それらのリクエストについては、古い本は公立図書館から借り、専門書は大学図書館から借りることで対応している。

司書の雇用のきっかけともなった筑波大学附属図書館と附属校の連携を模索するプロジェクトが動く中で、大学図書館との連携はスムーズに進んだ。大学図書館に出向き、利用のニーズが高いことを伝えたのち、貸出の手段・方法を検討し、ルールを決め、2012年度の終わりには図書館間貸出の試行が実現した。その結果2013年度は大学図書館からの貸出が56冊に及んでいる。



公立図書館からの貸出は、授業支援に応じたものや、教員の授業の参考資料、生徒のリクエストで絶版かつ大学図書館では取り扱いのない資料等を借りるなど、用途を広げ2013年度は78冊となった。国立大附属ゆえに、地域の公立図書館との連携は公立校と異なる。団体貸出が適応になる場合と、そうではない場合がある。本の借り出しに公立図書館の輸送サービスは適用されないため、貸出数は運べる量に限定される。利用期間も団体貸出が適応されれば3ヶ月となるが、適応されなければ2週間と短く、学習資料として利用する際には大きな課題だ。

一年目の大学図書館や公立図書館からの貸出利用は特定の（専門的領域を深めたい）生徒のニーズに応じて実施され、利用経験のある生徒がリピーターとなりながら徐々に用途を広げていった。二年目以降はひとつの制度として全校生徒に告知できるようになった。

しかし利用する生徒は大幅には増えていない。生徒に対し大学図書館を利用できるという事実の周知と、蔵書を調べリクエストする利用の促進をどのように行っていくかが次なる課題となっている。

大学図書館の利用が可となった次のステップとして他附属の中学校、高等学校等、同種の学校図書館との貸し借りを模索している。一校単独では不足しがちな学校図書館の蔵書構成を充実させていく可能性を、引き続き追求していきたい。

## 2.2 図書館の環境整備

図書館が居心地の良い空間であってこそ、利用は促進される。中・高生が共に使う図書館、中学棟と高校棟をつなぐ通路に面した図書館、自習ニーズの高い図書館という特性を持つ本校図書館を、より快適に過ごせる場になるよう工夫をこらしてきた。館内の配置を変え、備品を整備する、などである。

高度情報化推進事業の取り組みの中で、2012年度に生徒有志による図書館デザインコンテストが催され、本校図書館に対する生徒の現状認識、期待、ニーズ等が話し合われた。話し合いのプロセス、提出されたデザインの骨格をなすコンセプト、デザイン案のいずれもが、本校図書館のイメージを作る上で具体性をともなって参考になった。それら生徒のデザインに向き合いながら、2013年度に行われた図書館デザインを考えるワーキンググループの教員の話し合いは、教員各々が抱えている本校図書館の方向性や望まれること等が言語化、可視化され、図書館空間を構築していく方針を固めていくステップとなった。



並行して事業の一環として行ってきた他校の図書館訪問や、司書教諭のコーディネートによる他校の学校図書館関係者との交流からも示唆を得た。(注1) 実際に学校図書館に足を運び見ることによって、どのような広さの空間をデザインし、どのような配置、どのような展示、どのようなコーナーを設け、環境を整備し

ているかわかる。またその際にどのような意図をもってそれらをデザインしているか、重点をおいていること等、学校司書の方々に聞き学ぶことが多々ある。

このような他校図書館訪問に加え、他の筑波大附属の小中高の図書館の司書や司書教諭の方々とつながりを持てるように、各校図書館を訪問し情報交換を行った。さらに筑波大附属校だけではなく、国立大学の附属校という共通項をもつ東京大学教育学部附属中等教育学校、お茶の水女子大学附属高校・同中学、東京学芸大学附属高校・同世田谷中学などの学校図書館の関係者と共にネットワークをつくり、知恵やアドバイスを得ている。それらは本校図書館の空間づくり、環境整備等に大きく反映されている。

### 2.2.1 蔵書検索システム (Opac) の導入

司書着任前の 2008 年頃から図書館の電算化が進められ、フリーソフトにより蔵書管理を行ってきた。2012 年度に高度情報化推進事業の一環として、図書館蔵書管理システムを入れ替えて、生徒が校内のパソコンから蔵書検索できるようになった。

検索の利便性を向上させるため、館内全ての本の書誌情報を入れ替えて本の情報を充実させ、全集類や本校生徒による地域研究報告書やテーマ研究報告書等の書誌情報には目次を追加するなど、検索ワードを増やす工夫をした。地域研究報告書についてはサマリーを追加して、更に検索ワードを増やして欲しいという教員からの要望もある。報告書は、訪問先を選ぶ際や、訪問先のインタビューと調査をまとめて報告書を作成する際に最も利用されている。その実態にあわせ、訪問先を資料情報として順次追加する作業を行っている。

高度情報化推進事業による ICT 化推進のため、2013 年度には図書館が位置する 7 号館に無線 LAN 環境が整備された。2014 年度に入ってから、図書館用タブレット端末 2 台が導入され、生徒の蔵書検索用に貸し出しをはじめた。タブレットで本の検索をしながら館内を歩く生徒の姿が見られはじめています。

また同事業の中で開発された検索エンジン「筑駒研究情報検索システム」(本集 p187～参照)により、本校図書館と筑波大図書館の蔵書検索を同時に行えるようになった。この新検索システムと筑波大図書館の蔵書取り寄せの周知をはかり、新たな図書館の活用につなげてゆきたい。

### 2.2.2 わかりやすい配架と案内表示

書架のレイアウトについては、本の分類や利用者の動線を考慮して、本を探しやすいように並べ替え、参考図書を別置してコーナーにまとめ、館内全体にわかりやすい案内表示を付けた。その際、SSH 指定校でもあり、理系に強い本校の特色が現れている 4 類の自然科学の本が充実した書架は特別配置にするなど、レイアウトには蔵書構成を反映させた。



また、書庫を活用して古い本を移動すると、本の表紙を見せて置く面出しスペースも生まれ、埋もれていた新しい本が活かされるようになった。分野によっては古い本が誤情報をもたらす場合もあり、保存を目的としない学校図書館では本の循環は活発に行われなくてはならない。棟を異にするが、書庫が完備されていることによって、スムーズに別置が行えている。

### 2.2.3 レイアウト変更

これまで自習利用が中心だった図書館で授業を行えるようにレイアウトを変更した。1 クラス分の座席を確保し、自習利用者と授業利用者やその他の利用者が共存できるよう、授業スペースと自習スペースの場所を入れ替え、空間を書架でゆるく仕切った。場所を入れ替えた結果、授業スペースのそばに書架が並び、本を活用しながら授業ができるようになった。奥へ移動した自習スペースは落ち着いた空間になっている。



2013年度3学期の試行期間を経て、2014年度からは図書スペースとコンピュータスペースの間の仕切りが昼休みと放課後に開放され、生徒が書架とPCを自由に行き来することができるようになった。

授業でも必要に応じて仕切りを開放し、図書スペースの資料とコンピュータスペースのPCを行ったり来たりしながら、本とWEBやデータベース等を用いて調べ物をし、レポートを作成するような授業が展開され始めるようになった。2014年度からは、高度情報化推進事業で1クラス分のタブレット端末が導入され、図書スペースでの授業にも利用され始めている。



2014年度秋には、それまで書架の間の通路に仮置きされていた1畳分の畳スペースが、レイアウトを変えて3畳分に拡大された。四方を7類(画集・スポーツ・コミック等)と9類(文学)の書架に囲まれていて、隠れ家的な雰囲気の中でゆっくり読書を楽しめるような空間になっている。

この畳スペースは、前述の「図書館デザインコンテスト」で優勝したチームのアイデアを取り入れた試みで、生徒が落ち着いて利用している姿が見られる。館外に雑誌のバックナンバーが置かれたコモンスペースがあるものの、これまでの本校図書館になかった“くつろぎ”の要素が加わった。



大きなレイアウト変更は事前に部会や職員会議にかけて教員の意見を聞き、生徒には事前事後のアンケ

ートを実施し意見や感想を聞くプロセスを経て、賛成、反対、様々な声を反映させている。同時にそれらの意見や感想は司書が図書館環境を快適にデザインするための計画や改善に最も役立つデータとして活用し、実施していることへの評価として耳を傾けている。

レイアウト変更にあたって危惧されたのは自習利用者と、授業利用やコンピュータスペースの開放、畳スペースの設置による新たな利用者との対立だったが、生徒の声を聞いたところ概ね改変に好意的な結果を得られている。自習、授業、くつろぎ、書架とPCを行き来する利用のいずれも学校図書館の望ましい利用形態である。どの目的で訪れても、互いを尊重し合いながら共存し、自律的な利用マナーが育まれることを願っている。

## 2.2.4 備品の整備

授業スペースには分割式ホワイトボードや大型モニターを設置した。授業や委員会、打ち合わせ等に利用されている。分割式ホワイトボードは、持ち出して教室での授業に利用したり、一時的な掲示板の用途に使うこともある。大型モニターは、授業だけではなく、図書館内での生徒の作品を展示する際にも使われるようになった。それら利用の実態に応じ、授業利用とは別に館内展示専用のモニターを設置するなど館内設備を整備している。

卒業記念品としてスツールが多数寄贈され、あわせて分割可動式も増設した。スツールは自由に持ち運ぶことができ、いくつか繋げて広く座るスペースを確保したい生徒や、書架の片隅に運びひとりでひっそりと本の世界に入り込みたい生徒が、各々のニーズで自在に活用している。



利用する生徒から「机上の消しゴムのかすがなんとかならないか」という声をもらい、他校の図書館見学からアイデアを得て各机にそうじ用の小箒と小型ゴミ箱を設置した。「計算用紙に裏紙をリサイクル利用できないか」との声をもらい、裏紙リサイクルボックスを設置した。時間割の確認に来る生徒のために時間割表をカウンターに設置したり、図書館の授業利用の際に自習できる空き教室を探す生徒のために空き教室表示を掲示した。このように生徒の小さなニーズに応える試みを積み重ねながら館内が居心地の良い場所となるための整備を続けている。

### 3 見える授業、見える活動、見える学校

図書館の「蔵書」や「環境」を整備しながら、それが「利活用される」ことが図書館デザインでは重要である。本校の図書館＝「通路際にあるオープンなスペース」という特性を活かし、様々なものを可視化し、図書館に情報や人が行き交うことに取り組んでいる。

#### 3.1 展示、コーナーづくり

##### 3.1.1 教員、授業、課題等のコーナー、専用ブックトラックの設置

教科推薦図書はコーナーを設け、教科名のもとに入荷した本を並べ、推薦した教員名も明示した。授業と関連ある本はもちろん、教科を越えて教員が興味関心を持ち生徒に読ませたい本も推薦してもらうことができ、生徒たちは教員の名前に惹かれて、本を借りるといった循環が生まれた。教員にも、自ら生徒に読ませたい本を置く図書館であることが浸透してきたと言えるだろう。

教員名を付したコーナーも設置した。授業関連のみならず、年間を通じて、教員が個人的に紹介したい本、時事的に紹介したい本などを置いておける場であり、教員の個人リクエストによって入った本もこのコーナーに並べている。授業で紹介されると、生徒が借りにくる姿が見られ「あ、この本が授業で紹介されたんだな」とわかる動きをしている。

教員から、図書館内に準備室の本を置けないか、という相談があり、教員用にブックトラックを設置した。授業で用いる資料や生徒に課すレポートに関連する本を並べた。これまで準備室を訪ねる生徒には個別に貸出をしていた資料群ということだったが、図書館に設置することで、準備室に足を運ぶ時間がなかったり、

そこまではハードルが高い生徒にも、手に取りやすくなった。



他の教員からも自身の蔵書や館内の蔵書からテーマに関わる資料を一定期間設置することを望まれるようになり、ブックトラックを利用してコーナーを増やしている。それらのコーナーによって、生徒が教員の蔵書を活用しやすくなったのはもちろんのこと、各々の教員がどのような資料を使いどのようなテーマの授業をしているのか教員間でも知る機会となったようで、「この先生はこんな授業をしているのか」「この本を〇〇先生に借りよう」と言った吹きも折に触れて聞く。

また、英語で書かれたコミックを持つ先生から人気漫画の英語版を提供していただき、カウンター前に設置した。生徒のコミック類への人気は高く、カウンター前に繰り返し訪れる生徒の姿が多く見られている。

授業成果の発表の場としても図書館は使われるようになってきている。書写の授業では、生徒の制作した俳句や格言を書写したものを図書館の大型モニターに映し出し展示した。モニターに写真や作品等の映写を行うと、通路をゆく生徒や教員が通りすがりに足を止め、しばし作品に見入る姿が見られる。情報を届ける場として今後のさらに活用されることが見込まれる。



### 3.1.2 部活や委員会、行事など

テニス部、野球部、ハンドボール部、陸上部、サッカー部、山岳部、園芸部等の推薦図書コーナーを設けると、そこに入荷するのを待ってユニフォーム姿で足を運んだり、園芸雑誌等をリクエストする生徒が現れるなどの変化が生まれた。

また、図書メディア委員による企画展示コーナーを設け、1ヶ月に一度ほど企画替えをしながら展示を行うと、そこに展示したタイトルの貸出数はのべ231冊におよび年間貸出数の12%をしめた。また図書館に設置された大型モニターにおいて図書メディア委員が作成した本紹介のスライドをエンドレスで映し出す試みも行った。

生徒会、自治会等からの要望で過去歴代の会報や文化祭等の資料をファイルし、必要に応じて閲覧できるようにバックヤードに設置している。音楽祭の前には音楽に関する展示を行い、文化祭が近づく頃になると前年度のポスター、チラシ、写真等を展示している。終了後には今年度の写真やポスター、チラシを展示している。これらによって、過去の資料を次へ活かす循環が生まれることを企図している。



### 3.1.3 地域研究報告書、SSH 報告書、各種報告書コーナーの設置

本校の特色を表した「地域研究」では、中1・高1は高原での山歩き校外学習を行う。中2は東京地域について、中3は東北地方について、高2は関西地方について、グループで訪問調査を行う。テーマを決め、訪問先を選出し、質問を考え、訪問のアポイントをとり、下調べをし、訪問ヒアリングを行い、報告をまとめる。

前年度の3学期から準備にとりかかり、新年度の5月に訪問を行い、1学期末に報告会が行われる。教員にとっても生徒にとっても教科を越えた学習であり、かつ外部との接触、外出を伴う学習であるため、力を入れている。

この学習で最も参考になるのは、過去の先輩達の実施した地域研究の報告書である。それらをたよりに、テーマの決め方、訪問先の決め方、まとめ方のスタイルを予備知識として入れながらグループでの作業を進めていくことになる。先にも述べたが、蔵書検索においても、これらの過去の資料類を利用しやすくするために、目次や訪問先をデータベースに登録し検索しやすくなる工夫を行っている。

東北・関西地域研究では過去の報告書に照らしながら、東京にあるアンテナショップから資料を取り寄せ、図書館でも閲覧できるようにしている。

本校のもうひとつの特色はSSH指定校であることだ。もともと理系に強い学校であり、科学の発展を哲学、社会学、国際的視点からも考える立場から取り組まれている。他の学校の高校生がどんな研究をしているのか生徒に知ってもらいたいという教員からの希望で、本校を含めた全国のSSH指定校から届けられる報告集等を集めたSSHコーナーを設けている。その脇には、本校で取り組んだ学校活動のテーマ研究や作品集などの報告書類もひとつのコーナーにまとめ設置している。



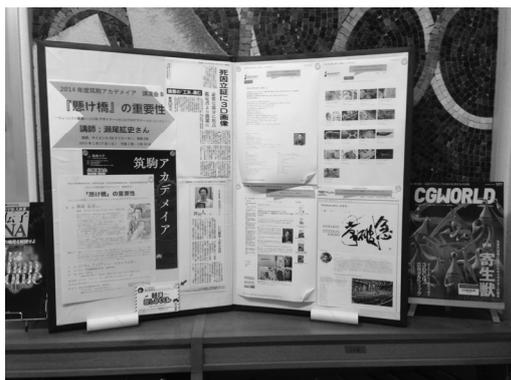
これらのコーナーを設置したことによって、地域研究、テーマ、ゼミなど、総合学習の研究テーマを設定する時期になると、コーナーの周辺で過去の報告書や他校の報告書などを手に取りながら、課題を探す生徒の姿が見られるようになってきた。

### 3.1.4 SSH や筑駒アカデミア、学校行事に関わる展示

本校ではSSH指定校として年数回講演会が行われる。図書館でもそれに合わせSSH講演会関連資料の展示を行っている。当初は教員からの依頼に応じてカウンター周辺やカウンターに近い中学棟からの入口付近に展示していたが、現在は依頼がなくとも校内スケジュールを確認しながら展示づくりを行っている。目

にとまりやすい高校棟からの通路沿いや、窓際の展示コーナーを用い、規模を拡大して、講演会情報と関連資料を合わせて展示している。展示資料には、講演内容が専門的になるため大学図書館の貸出システムをフル活用し展示資料の充実を図っている。また、図書資料だけではなく、本校契約有料データベースやウェブサイト上の情報も用いて展示するよう工夫している。本校で利用できるデータベースを知らせ、使い方を示す意図も含め展示の機会を活用している。

講演会は希望者のみの参加となる。コーナー作りにおいては、より多くの生徒に学校の取り組みが見え、このような機会への参加が増えることを願い、参加できなくともテーマに関心を持ってもらえるよう、目にとまることやわかりやすさを心掛けている。校内を移動する生徒や教員が展示コーナーに足を止めて、資料を見たり、手に取ったりして利用され、時には講演会場に移して展示されることもある。講演者が事前に校内を歩いた際に図書館の展示に目をとめ、本を寄贈してくださることもあった。



国際交流では交流校からの記念品の展示コーナーと共に、交流国に関する資料を置き、訪れた先での写真や、本校に来校した生徒たちからの手紙などを展示している。訪問に参加できる生徒は一部であるが、参加できない生徒にも様子が伝わるよう心がけ、広報や報告の展示を作成している。

「図書館に行くと学校で何が行われているかが見える」。図書館を訪れた際に教員から発せられた言葉である。以上の取り組みへの評価として、私たち司書が図書館を学校が見える場にすることを目指す上で心に刻んでいる言葉だ。



## 3.2 授業との関わり

### 3.2.1 図書館の授業利用の様子

授業との関わりにおける図書館の利用状況は多様である。どのような利用ができるか、司書教諭が教員に、実践した授業の様子をヒアリングし、授業事例のプリントを配布するなどして教員間で情報を共有できる工夫を行っている。

その実践のいくつかを下記に紹介する。

- 1) 英語科では課外授業として、中1生向けのリーディングを行うために図書館を利用した。新たに難易度の易しい薄いリーディング用のテキストをブックトラック一つ分用意し、時間内でたくさんのテキストを読むという課題で実施した。日本語訳されている絵本の原作本なども織り交ぜながら行った。課外の時間帯を用いて実施できること、ブックトラックごと実施する机に横付けして行えることなどが、教員が図書館で当授業を行う上でのポイントであった。
- 2) 世界史では、高2の複数の生徒が同時期に同じ内容で資料を探していたことから、課題がレポートで出されたことを知った。図書館に所蔵の少ない分野であったため、すぐに近隣の公立図書館で資料を集めて館内にコーナーを設け、同時にそれらの内容の本を購入し充実を図った。翌年は、教員の側から同内容のレポート課題を出す旨、事前に司書に相談があり、前年に増やした資料や大学図書館から借り出した資料等を用いてあらかじめコーナーを設け、さらに資料を追加購入し授業の始まりに合わせて準備することができた。司書が先行して動くことで、教員側からも申し出やすくなることがわかり、生徒たちから得た情報でコーナーを設置することも積極的に行いはじめた。



- 3) 中2や高1の美術科の授業では、図書館内にある写真資料を生徒に自由に選ばせ、写真を模写するという授業を行っている。教員が選んだ資料を美術室に持ち込む形や、授業時間に生徒が図書館まで自由に資料を探しに来る形で行っている。図書館のすぐ近くにコピー機があり、同じ本から別々の写真を用いたい生徒たちが該当部分をコピーして所持し、複数回(数週)に及ぶ模写の授業にのぞむことができる。コピー機との位置関係がメリットとなり生かされた形である。
- 4) 中2の国語科の絵本をテキストにした授業では、同一絵本21冊(生徒2名で1冊利用、1クラス41名)を公立図書館等から借り集めて資料提供した。教員との打ち合わせで、文字のない絵本を使って読解行為を考えるとという授業の趣旨から、絵本が現物であることの重要性を理解し、資料の貸出・返却計画を立てるために授業期間と資料の使用期間を確認した。本校所在地の世田谷区立図書館では団体貸出(200冊/3ヶ月)が利用できるものの当該絵本の所蔵が1冊のみで、かつ隣接区市では団体登録できなかったため、範囲を広げて都内図書館の所蔵状況を調べ、司書2人で手分けして借り出し作業を行った。団体貸出に該当しないためシステム上同一タイトルの本を複数予約できず、複数冊を借り出すために所蔵館全てを回って借りた。一回の貸出延長や借り直して、4週間ぎりぎり使用期間中資料を確保することができたが、今後団体貸出が利用できない場合は、貸出期間や冊数の制限がネックになることも考えられる。
- 5) 国語科(古典)の授業では、教員の保管する和とじ本を用いて、本物の和とじ本に触れる機会を生

徒に提供すると共に、和とじ本に書かれた文章の読解(崩し字読解)を行った。この授業では、司書による和とじ本の管理と、図書館にある足のしっかりとした大机が貴重書である和とじ本を扱う場所として適切であることが教員のニーズと合致した。



- 6) 技芸科の連続セミナーや学年の総合学習の中で、司書が「調べ方」をテーマにして本校図書館が提供している資料やレファレンスサービスや有料データベースなどを紹介し、使い方を教える授業も行っている。その際には図書館で授業を行い、蔵書検索をして書架を探したり、雑誌・新聞・辞典等のコーナーを紹介して資料を手にしたたり、データベースで検索してみたりと、実際に使う体験ができるよう心掛けている。
- 7) 毎年度夏休みの前後に受け入れている教育実習生も図書館を利用することができる。空き時間に本を探して書架を巡る姿や、机で閲覧している姿が見受けられる。授業準備や授業資料として本を借りていく場合は貸出対応し、授業のアイデアを練るためのレファレンスも受けつけている。これらの体験が教育実習生が教員となったときに学校図書館の利活用につながることを願っている。

### 3.2.2 ブックトーク、ブックリスト

司書のもとに日本史や国語、数学などの授業や課題で、生徒から生徒に本を紹介するブックトークや読書紹介を行った際の生徒が紹介した本のリストを寄せられるようになった。それらのリストはコーナー作りに活用したり、選書に参照している。このコーナーは他の教科、授業でブックトークや読書紹介を行っていることを教員間に知らせる場になっている。コーナーには友人と一緒にやって来て紹介された本を借りたり、

紹介しなかった別の本を友人にすすめる生徒の姿も見られ、図書館に足を運ぶきっかけとなっている。



また司書がブックトークの模擬実演を教室で行う際には、本への親しみ以上に、図書館という場所や司書への親しみを促すことも狙いに入れながら、本ばかりではなく、雑誌や図鑑、事典、写真集等、館内にある様々な種類の資料を用いる工夫を行っている。生徒がブックトークを行う直前にはこのテーマでこういった本はないか、と相談を受けて一緒に本を探すこともあり、司書と生徒のコミュニケーションの機会、レファレンスの機会にもなっている。

### 3.2.3 教職員の多様な利用

教職員の利用は授業にとどまらない。様々な用途で図書館に足を運ぶようになってきている。通勤や出張の電車の中で読む本を求めて。自身の研究の資料作りのために。公立図書館では借りられない本を借り。勤務時間の関係で地元の図書館には立ち寄ることができないので勤務しながら借りられる利便性で。校内の樹木の病気を調べに。週末の旅先の地理や歴史を調べに。昼休みのリフレッシュで。最新の情報を手に入れに。など、それぞれの目的で立ち寄る。

ある職員は、英語検定試験の受験を目的に、多読の勉強をするために英語のリーダーを利用して読み続けた結果、試験に合格した。合格後も、もっと長いものが読めるようになりたいと足繁く通い、読み尽くして新たにリクエストを寄せるほどになっている。

教職員のおとなたちが 10 代の生徒たちに混じり、本を探しまわる姿、スツールにそっと腰掛ける姿、机に向かい脇に本を積み上げる姿、たくさんの本を返してはまた借りていく姿。生徒たちにとって、これらの姿そのものが、おとなになっても図書館は利用する場所、利用できる場所なんだ、ということ伝える。本校図書館は生涯学習を实践するおとなを身近に、日常的に見ることができる場となっている。

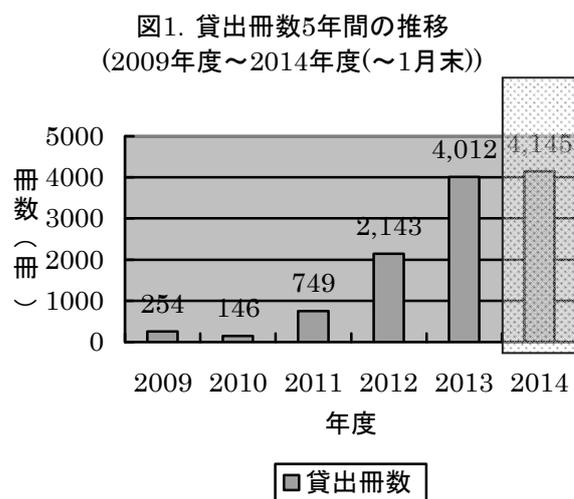
## 4 結果

### 4.1 貸出状況の推移

ここまで見てきたさまざまな取り組みの結果、貸出数は年々増加している。それを示したのが図1である。

図1. 貸出冊数5年間の推移

(2009年度から2013年度+2014年度(～2015/1))

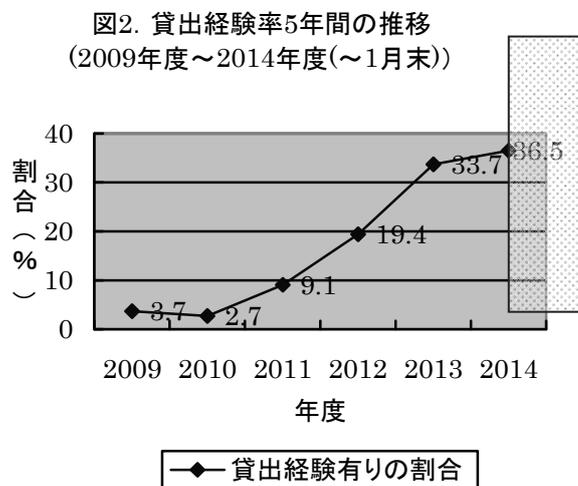


中には年間150冊を越えて借りる生徒も出てきている。しかし、全体としては特定の利用者に偏った数字ではなく、図書館を一度でも利用したことのある者が少しずつ増えてきた結果である。図2では一年のうちに一度でも本を借りる経験をしたことのある者の割合を示した。全構成員のうち1割程度だった貸出経験者が2割、3割と少しずつ増え続けていることがわかる。

図2. 貸出経験率5年間の推移

(2009年度から2013年度+2014年度(～2015/1))

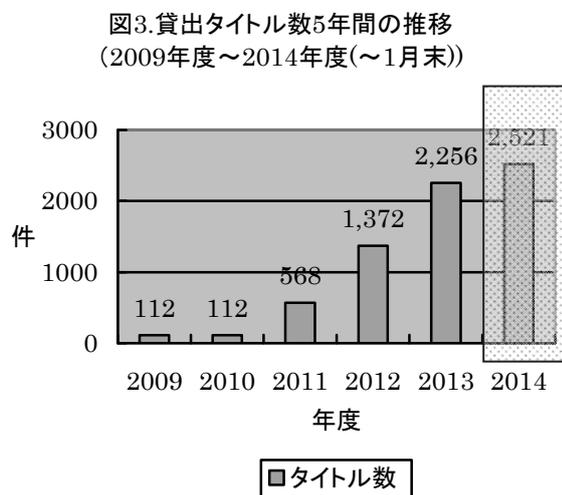
※1回以上貸出経験のある人数の割合



また、貸し出される本の種類（タイトル数）も特定のベストセラーに限らず、図3のとおり広がっている。館内の本が幅広く手に取られていることがわかる。

図3.貸出タイトル数5年間の推移

(2009年度から2013年度+2014年度(～2015/1))



図書館の利用はこれまでに見てきたように、本の貸出に限らず、自習の場だったり、読書空間だったり、グループワークの場だったり、情報を得る場だったり、また情報を発信する場だったり、利用主体の関わり方により様々である。貸出状況はあくまでそれらの利用形態の一側面と認識しながら、ひきつづき指標のひとつとして推移を見守りたい。

#### 4.2 図書館オリエンテーション

2013年度より、新入生向けの図書館利用オリエンテーションを図書館内にて実施するようになった。わずか15～20分程度の時間ではあったが、実際に図書館に足を運び、カウンターでの本の借り方、返し方、本の配列を説明しながら書架の間を巡り歩いた。



また2013年度からは入学の時期にあわせて、前年度の終わりに筑駒生の今年イチオシの一冊「本森大賞」

(図書メディア委員発行の会報「本の森から」にちなんだ命名)の投票を行い、新年度に各賞発表コーナーを設けている。図書館案内のしおりでも紹介し、新しい学校の中のウエルカムな場所として図書館を印象づけている。



図書館の努力だけではなく、教員も図書館や本に親しむ工夫を凝らす授業を展開している。2012年度の国語科の授業では、3学期の授業で新入生に読んで欲しい本を紹介するワークショップを行い、ポスターを作成した。2013年度の新学期にそれを図書館で使わせてもらい、本と共にウエルカムコーナーとして展示した。そのコーナーの本は新入生たちが次々と借りていった。

学年の取り組みにおいても、中学1年生の長期休み前の「学年便り」では休業期間中の読書を促進することを目的に教員からの推薦図書のリストが紹介された。紹介された本を集めてコーナー化し貸出を行っている。



また、2014年度の司書教諭が担当する中1生の国語の授業の中では、毎授業の冒頭で生徒がブックトークを行い、用いる本のうち一冊は本校図書館の本に指定した。その取り組みにより、授業の一環としても図書館に親しむ機会を設けられ、すべての生徒が中一生のうちに一度は本を借りる経験ができた。それらの結果、中1、中2生の本の貸出冊数は他の学年に比べて高い傾向にある。

本校は中学3年生を終えると一度卒業し、高等学校に入学し直す形をとってはいるが、実質としては中高一貫校に近い。その入口である中1生が図書館に親しむところを導入として、その後、彼らがどのように図書館の利用を継続し、深めていくことができるかが、大きなテーマになると考えている。

## 5 おわりに

### 司書教諭 澤田英輔

自由な空間の中で、自立した学び手が育つ場所。着任後三年をかけて二人の司書が描いた本校図書館の未来図を、本校全体の文脈の中で意味づけると、そう言うことができるだろう。

図書館の具体的な変貌ぶりは、本稿でこれまで記された数々の取り組み内容や数値の変化を見れば明らかだ。そして、こうした活動を貫いてきたのは、二人の司書が色々な学年の生徒や教職員の声を聞きながら、そのどれかに偏らず、慎重にバランスを取ろうとしてきた姿勢である。単に、色々なユーザーの声を公平に聞いたということではない。図書館という器を狭義の「学習」のためのものではなく、生涯を通じた広い意味での「学び」の場所にしようとしてきた、ということである。

実際この三年間、本校図書館はさまざまなレベルの「学び」を提供できるように整えられてきた。好奇心に満ちた中学生の知的な世界への出会いのため。受験を控えた高校3年生の自習のため。図書館の資料を活用して行われる授業のため。教員の授業準備のため。大人たちや子どもたちの個人的な読書の楽しみのため。畳の上でくつろぐため。一人静かに、物陰に隠れて精神を自由に遊ばせるため。小さな図書館ながら、ここには様々な選択が生まれ、生徒も大人も、この図書館でどのような学びを展開するか自律的に選択できるようになっている。

同時に、書籍とともに自分の世界を広げるような学校内外の様々な情報も、図書館に集められてきた。一般的な図書展示、校内の行事の展示、授業の写真、各種講演会の情報...それらの情報は、決して見ることを強制してはいないが、そこを行き交う人々の目に自然と触れ、彼らの世界を広げていく。

本稿で示されたデータにもある通り、司書が赴任する前(2011年度以前)の本校図書館は、本がほとんど借りられず、受験前の高3が勉強をする目的で使うだけの「本のある自習室」に過ぎなかった。その事態を

「図書館は生徒が自ら学ぶ場所」と肯定的に捉える人もあるいはいたかもしれないが、それは「学ぶ」という行為を極めて狭く捉えた見方にすぎない。現実には様々な「学び」のありようがあり、大人も子どもも自らの意思で自立した学び手として存在しうる。その可能性を、新しい本校図書館は確かに指し示している。

また、こうした図書館の姿勢は、本校の伝統的校風とも言える「駒場の自由」とも合致している。「駒場の自由」とは、何よりもまず選択の自由である。選択の自由、つまりは失敗する自由を保証された人々—子どもも、大人も—が、試行錯誤し、やがて少しずつ自分なりの世界を獲得し、自立し、生涯をかけて自由な人になっていく。

ここで自由になるとは、私達がゼロから自分の世界を作り出すことではない。まずは自分の周囲の世界を知り、一つの物語として自分の中に位置づけ、そこから自分の意思で新たな世界を語り始めることである。

図書館は、私達を自由にする。図書館は、私達が自由になるための様々な学びの自由を提供する。私達が世界を受けとめ、自分の意思で語り始めるための、先人の知恵や物語を集積する。私達の周囲の様々な人々の動きにも触れられるようにする。このように図書館は、そこに集う人に様々な学びの機会を保証し、自立した学び手の育つ場所になることで、「駒場の自由」の実践を支える重要なインフラにもなりうるのだ。

そして本校図書館は、その一步を、この三年間でたしかに歩みだしたと言える。

【注釈】

1) 他校図書館訪問記録

\*訪問が重複する学校は、初回のみ記録

|       |  |
|-------|--|
| 2012年 |  |
| 5/23  | 東京学芸大学附属世田谷中学校                                 |
| 5/24  | 筑波大学附属高等学校、お茶の水女子大学附属高等学校・中学校                  |
| 6/8   | 東京大学教育学部附属中等教育学校                               |
| 6/19  | 東京学芸大学附属高等学校                                   |
| 6/27  | 筑波大学附属図書館                                      |
| 7/11  | 獨協埼玉中学校  |
| 7/31  | 筑波大学附属坂戸高等学校、埼玉県立新座高等学校みはらし図書館                 |
| 8/20  | 都立広尾高等学校                                       |
| 8/22  | ICU 高等学校                                       |
| 10/1  | 名古屋大学教育学部附属中・高等学校、相山女学院大学附属高・中学校               |
| 10/2  | 関西大学ミュージックキャンパス初等部ライブラリー・中高ライブラリー、関西学院大学中学部図書館 |
| 11/10 | 玉川学園マルチメディアリソースセンター                            |
| 12/4  | 筑波大附属小学校                                       |
| 12/18 | 明治大学和泉図書館、明治大学付属明治高・中学校                        |
| 2013年 |  |
| 3/15  | 横須賀学院中学高等学校                                    |
| 3/29  | 東京工業大学附属高等学校                                   |
| 7/29  | 千葉大学附属小・中・大学図書館                                |
| 8/27  | 神奈川県立向の丘工業高等学校                                 |
| 2014年 |  |
| 1/30  | 中央大学附属中学校・高等学校                                 |
| 6/6   | 城北埼玉中学・高等学校                                    |
| 7/23  | 日の出中・高等学校、都立新宿高等学校                             |
| 7/27  | 工学院大学附属中学校・高等学校                                |
| 8/20  | 立正大学附属中・高等学校                                   |
| 8/23  | 八王子学園八王子高等学校、都立狛江高等学校                          |
| 10/17 | 清教学園、灘中・高等学校                                   |
| 10/18 | 大阪教育大学附属高等学校池田校舎                               |
| 2015年 |  |
| 1/21  | 広尾学園   |

【参考文献】

1. 村上恭子 (2014) 『学校図書館に司書がいたら』少年写真新聞社
2. 学校図書館問題研究会編 (2014) 『学校司書って、こんな仕事』かもがわ出版
3. 成田康子 (2013) 『高校図書館』みすず書房
4. 成田康子 (2012) 『みんなでつくろう学校図書館』岩波書店
5. 平久江祐司 (2014) 『司書教諭と学校司書の連携の在り方』学校図書館 766号, p 41-44
6. 平久江祐司 (2014) 『学校司書の法制化をめぐって (第4回) 今後の学校図書館における職員制度のあり方』図書館雑誌 108巻2号, p112-113